

新 今昔物語

第1話

市の指定文化財①

石造九重層塔

野崎観音から飯盛山に登る途中のところに、石造九重層塔があります。花こう岩製で、総高は3.3mと高いものです。

この塔の最下層の台座部分には、永仁二年(1294年)に主君と両親の菩提を弔うため、入蓮と秦氏によって造立されたことが記されています。この二人がどういふ人であるかについては分かっていません。

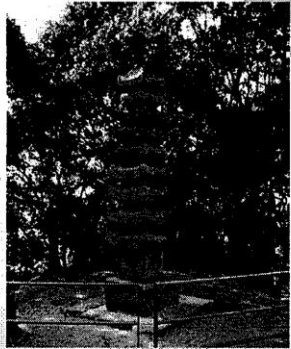
石塔の造立は、死者の供養を目的として、日本では飛鳥時代から行われるようになり、鎌倉時代になると盛んになります。

この九重層塔は、下から二石目の塔身のところには、種字(梵字)で金剛界四仏が刻まれており、その字の断面がV字型を現す「葉研彫」となっています。また、各層の屋根部分の裏側には段がつけられており、屋根を支える垂木

が形式的な形で表現されています。屋根の四方の反りが激しいところは、近畿地方では珍しい形となっています。このような葉研彫や垂木表現は鎌倉時代の石造塔の特徴を示すものです。ただ、本来は上部にさらに相輪があつたはずですが、現在はなくなっています。

造立年代が明確な石造の塔は珍しく、造立年の銘が記されているこの塔は、年代を知る基準となる貴重なものです。

(市史編纂委員 岡村喜史)



野崎2丁目所在

新 今昔物語

第2話

市の指定文化財②

延徳銘地蔵菩薩石仏

阪奈道路の「竜間」バス停から北に急な坂を登り、さらに石段を登ったところに龍光寺があります。石段を登って左手に入ったところに地蔵菩薩の石仏があります。

この地蔵菩薩石仏は、二段につくった台座の上部を蓮台とした上に、舟形光背を背に立っています。右手に錫杖を持ち、胸の前にもつきた左手に宝珠を持つ通常の像です。

高さ128cm、幅65cmの光背に、高さ86cmの半肉彫りの像です。像の厚みにやや欠ける

ところや、蓮台が線刻で、衣紋の文様が直線的となつているところは、やや形式化が見られますが、像と光背の輪郭はバランスが良く、絶妙な印象を与えます。向かって左に「延徳二庚戌三月(1490)」の銘が

あることから、室町時代後期の造立と分かります。大東市内で確認されている在銘の石仏としては最も古いものです。

地蔵菩薩に対する信仰は、平安時代中期の末法思想に伴って広まり、室町時代には庶民の間でも盛んになっていきました。戦国時代の世に、地域の人々が地蔵菩薩に寄せた救済への願いからこの像が造られたものと考えられます。

(市史編纂委員 岡村喜史)



龍間所在